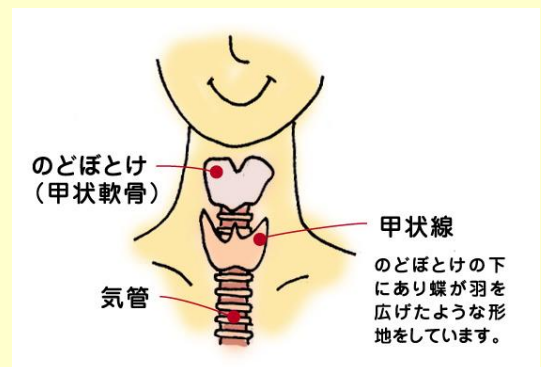


検診で甲状腺が腫れていると言われました

岡村病院 総合内科医 川村 誠



甲状腺ホルモンは成長や発達を促進したり、脂肪や糖分を燃やし体内のエネルギー産生したり、交感神経神経刺激作用として発汗、脈を速くさせたりします。場所はのどぼとけの下にある臓器です。通常は手で触ってもわからないことが多いです。



検診(首の部位の触診)でよく若い女性で甲状腺が腫れているから精密検査を受けてくださいと言われることがあります。多くは単純に甲状腺が腫大しているだけで経過観察で良い場合が多いですがときにホルモンが関与する病気の場合があります。甲状腺の病気はホルモンの病気と腫瘍(良性-悪性)の病気の場合があります。今回は主に頻度の高いホルモンの関係する病気についてお話しします。

大きく分けると甲状腺ホルモンが増加する場合と低下する場合があります。

増加する場合としては甲状腺機能亢進症(バセドウ病であることが多い)、甲状腺中毒症、無痛性甲状腺炎、亜急性甲状腺炎などがあり、低下する場合は甲状腺機能低下症、慢性甲状腺炎(橋本病)などがあります。

甲状腺ホルモンが多い状態のときの症状

疲れやすい、しんどい、動悸、発汗増加、手のふるえ、足のむくみ、よく食べるのに体重減少、息切れ、などいわゆる交感神経の亢進した状態となります。



甲状腺ホルモンが低下した状態のときの症状

疲れやすい、しんどい、顔、手足などが冷たく感じむくむ、声がかすれるなどほか、お年寄りでは記憶力低下、うつ状態、傾眠傾向など認知症と似たような症状になることもあります。



診断はおもにホルモンの状態を含め血液検査をまず行うことが多いです。甲状腺ホルモン低下状態では認知症と似ていることもよくあり注意が必要です。そして超音波検査で甲状腺の大きさ、性状、血流状態を調べます。また状態によっては心臓などに負担がかかるときがあり循環器系の検査をすることもあります。

治療はまず薬を使用する場合があります。甲状腺ホルモンが多い場合(バセドウ病など)に使用する薬は肝機能障害、顆粒球減少、じんましん、かゆみなどの副作用が問題になる場合があります。薬が使えない場合などは放射線治療や手術療法が適応になります。

今回はあまり話しませんでした。甲状腺にも良性-悪性腫瘍が起こります。この場合には首の超音波-CT検査、場合によっては病変部位の組織を少しとって顕微鏡で調べることもあります。治療としては主に手術となります。また甲状腺周囲にはリンパ節など他の臓器もありますので、手で触れたり、鏡を見たりして変化に注意しましょう。比較的若い女性に多い甲状腺機能亢進症(バセドウ病など)は人から甲状腺-首が腫れていると言われることがよくあります。その場合は血液検査などをしてください。